

令和5年度 CVPPPトレーナー研修 in 西川病院 を終えて

令和6年1月27日(土)28日(日)、2月3日(土)、4日(土)の4日間にわたって、CVPPP(包括的暴力防止プログラム)トレーナー研修を開催しました。西川病院職員 7名(作業療法士1名を含む)、松ヶ丘病院 2名、県立こころの医療センター 1名、合計10名の受講生の参加がありました。研修中は、受講生の方には演習を行っていただきながら、同時に「不信感をもたれないかわり方とは?」「周囲から見てもケアだと感じてもらうためには?」「いたわってもらえた、気配りしてもらえたと感じてもらうためには?」「味方である、と感じてもらうためには?」などをテーマにグループワークを行い、グループごとに自分たちのケアの方法について導き出していただきました。

研修後の評価表では、「日頃の自分のケアを振り返った時に、余裕がなかったり、患者さんに対する恐怖や陰性感情で冷たくなっていると思いました。相手のことを考え、寄り添うケアができるよう心がけていきたいです。」「暴力以前の日頃からの関わりが大切であることがわかりました。相手も人であるところを大事に考えていきたいです。」「これまで当事者の行動を制限する場合に『制圧する』といったイメージが強かったですが、CVPPPの理念を学び、相手を『守る』『保護する』ためのものであると理解できて良かったです。』といった感想をいただくことができました。

一方、「(暴力に対応する)自信につながった」という声は、他の項目と比べて点数としては低い評価となっていました。このことに関しては、手技を覚えたか、どうかの手技の修得度による自信ではなく、実際の臨床において興奮状態にある当事者の方の思いに寄り添うことができるのだろうか、という不安によるものだと考えています。

CVPPPでは、ケアとは良い、悪いで二分されるものではなく、確かな答えがあるものでもない、だからこそ当事者も私たち医療者側も不安になりながらお互いの幸福のために、当事者とともに悩み、考え続けていくものであると表現しています。

CVPPPは当事者の方を連れていくための技術ではなく、
当事者の方を ~自由~ にするための技術である

(CVPPP講義資料より)

精神科医療には権力勾配は確かにある。CVPPPが当事者と医療従事者をつなぐ架橋となる存在になれるように

~開放~

(CVPPP講義資料より)

CVPPPは暴力を ~科学~ する

(医療職のための包括的暴力防止プログラム、2005年)



Q&Aコーナー

Q. CVPPPって、そうは言っても最終的には抑えるための技術でしょ?

A. これまでに全国で1万人を超えるCVPPPトレーナーを養成してきたCVPPPですが、全国的にそうした認識は多く残っています。個人的には、その背景には、CVPPPの運営や従来の研修方法の問題、そもそも暴力そのものにケアとして対応する難しさ、そして私自身を含めこれまで伝達を行ってきたインストラクター・トレーナー側の理解や姿勢にも問題があった、と感じています。Q. のような声に対して、ただ「誤解である」と繰り返すのではなく、CVPPPにおける取り組みや、臨床でケアを実践していく中で、当事者の方や、スタッフの皆さんに真摯に向き合っていくことが最も良い方法ではないだろうかと考えています。「暴力をケアする」ということは、知識や技術的な事にこだわらず、私たちが医療者としてだけでなく1人の人として、当事者に対して、いたわりや気配りを持つことで可能になるとCVPPPでは考えています。ぜひとも今後のCVPPP普及チームの取り組みや、臨床におけるCVPPPトレーナーの活躍に注目していただけたらと思います。

「暴力や虐待という問題は日々の支援の連続の中で起きている」

「暴力か、暴力でないか、あるいは虐待か、虐待でないか、といったようなことは、

様々なグレーゾーンの中で、加害者側、被害者側の双方が不適切な環境の中で起きている」



(令和5年度精神科医療体制確保研修(前CVPPP1日研修) 精神障害当事者会ポルケ 代表理事 山田悠平氏)

発行：CVPPP普及チーム